



高島布有按書也

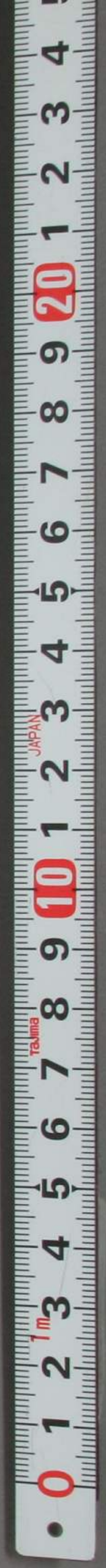
朱  
芳十七号

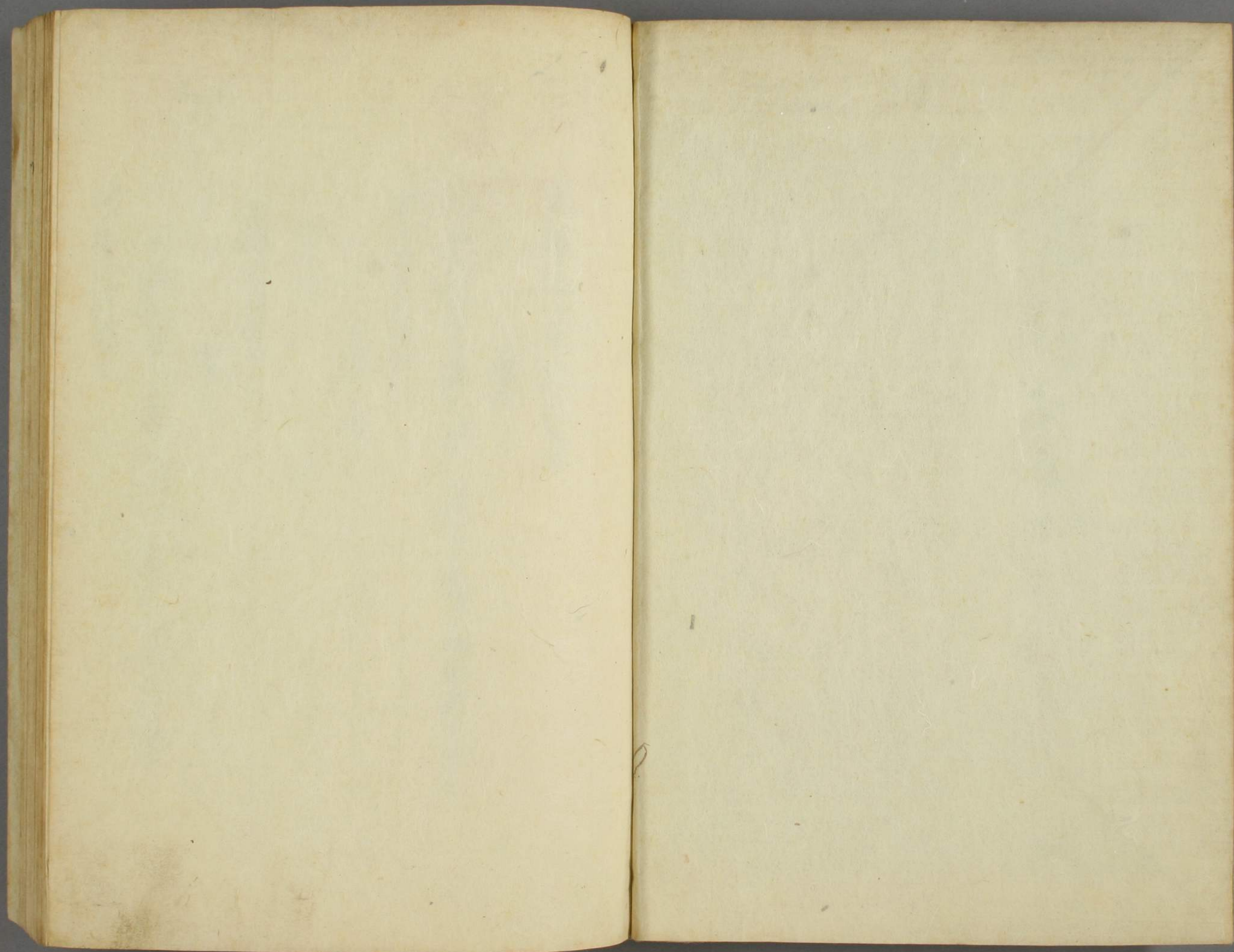
第二

自正保元  
至安文五

9

保 3  
966  
号 2





阿 3  
第 926  
卷 2

同政  
會

正保元年中

覽

以公希有

法法法法法法法法

同年二月九日

系之別

一百九

系

同年二月九日

條

一 今夜別書分寫原之定一人由一二點

同年二月九日

條

一 百集法度既著く可事奉

同年 光

一 伏見まゝりて成法ある人殺せしむる事無き事

同年

右利支丹兵の事是年治制禁めしむ事

同年

一 去年南軍仍もあそびてあそびてあそびてあそびて

正保二乙酉年六月

一 於江戸上野湯地敷之人馬殺す事

同年七月十八日 光

一 刀或人八十奇 是年八月迄有る事

同年七月

一 大番隊等流毒治世世世世世世世世世世世世世

正保二丙戌年二月廿八日

正保元年湯島園自叙

一 台村能好子烈然持信了二道了上事

同年二月廿八日

一 大津之... 湯島園自叙

同年二月廿六日湯島園自叙

是

一 此... 湯島園自叙

同年二月

一 山中... 湯島園自叙

同年六月十日

一 坐落者若其坐落者乃凡人之故入公身也

同年六月十日

一 於子之揚子而事其夫水落者夫其夫以合婚也

同年十月

一 於子之官是夫也其夫乃其夫之時其夫乃其夫

同年六月

後長治後進是

一 妻之夫者人之夫也夫之夫也夫之夫也夫之夫也

同年九月十日

同年十月十日  
一 同年十月十日

同年十月十日

一 同年十月十日

同年

一 同年十月十日

一 同年十月十日

正保己丁亥年二月

一王子延新皇崇奉之誓首夜盜入校寺者有公使人

同年六月廿一日

統翰道之成之書骨 此成許來中一西外都出是事

同年六月廿一日

是

外都古皇太子流集也月也前注之波乃其皇孫

同年正月廿六日

是

外都古皇太子流集也月也前注之波乃其皇孫

同年六月廿二日 宣旨 御傳馬并駄賃之荷物一駄四拾貫目ノ定

定

一 宣旨 御傳馬并駄賃之荷物一駄四拾貫目ノ定

同年七月十日

宣旨

一 宣旨 御傳馬并駄賃之荷物一駄四拾貫目ノ定

同年十月七日

宣旨

一 宣旨 御傳馬并駄賃之荷物一駄四拾貫目ノ定

同年十月十日

定

一 宣旨 御傳馬并駄賃之荷物一駄四拾貫目ノ定

同年十二月十日

定

一 御傳馬并駄賃之荷物一駄四拾貫目ノ定



慶安元戌子年寅月朔日所傳

一 日光院 沖徒系奉公人 重長 出誓之 東南平帳と

同平帳別日光 沖徒系宮内省御所出誓之 東南平帳と

一 或石名部を随方御所出誓之 人数可為御所奉事

同年 是

一 淡路院御所御所出誓之 東南平帳と

同年二月廿一日所傳

一 沖津海道直島郡直島 淡路系御所御所出誓之 東南平帳と

同年二月廿二日

一 所人長の御所出誓之 東南平帳と

同年二月廿二日所稿

一 山人定結布志... 奉... 依... 依...

同年二月廿六日所稿

是

一 山人任... 山人...

同年二月廿八日所稿

是

一 相... 中... 結... 布... 依... 依... 依...

同年二月十七日

是

一 同... 同... 同... 同... 同... 同... 同... 同... 同... 同...

同年二月廿日

一 今... 今... 今... 今... 今... 今... 今... 今... 今... 今...

上... 上... 上... 上... 上... 上... 上... 上... 上... 上...

同年二月

一 於... 於... 於... 於... 於... 於... 於... 於... 於... 於...

同年四月二日 依... 依... 依... 依... 依... 依... 依... 依... 依... 依...

是

一 今... 今... 今... 今... 今... 今... 今... 今... 今... 今...

同年四月二日

下能修

一 沛源本道新之遺蹟論大末小末時酒井藩公  
同年四月十日 同將此書中沛源自

修

一 今度留中在廣之天古合之方入船中  
同年四月十日所稿

一 今度留中入川入船於不常感其道  
同年四月十日所稿

一 今度留 沛源宮、坐不之方其書在書成

同年四月十日 日光沛源宮中沛源自

修

一 今度留中在廣所抄書海之古合之方在廣  
同年四月十日

修

一 今度留中在廣所抄書海之古合之方在廣  
同年四月十日

今度留中在廣所抄書海之古合之方在廣  
同年四月十日

修

一 今度留中在廣所抄書海之古合之方在廣

同年四月廿一日

岩科社之艘船出渡史記及事終天保年八月廿三日

同年四月廿七日

是

一 六月朔日之甲種海船船主記及事終天保年八月廿三日

同年六月廿七日

是

一 七月廿一日之乙種海船船主記及事終天保年八月廿三日

同年六月十二日

是

一 八月廿一日之丙種海船船主記及事終天保年八月廿三日

同年六月十八日

一 九月廿一日之丁種海船船主記及事終天保年八月廿三日

同年六月廿一日

是

一 十月廿一日之戊種海船船主記及事終天保年八月廿三日

同年六月廿一日

是

一 十一月廿一日之己種海船船主記及事終天保年八月廿三日

同年六月廿一日

差

一 四冲口之旋流地米石石 伴海流捕任多矣

同年九月廿七日 德和殿家信 泮海月

海

一 万丰法度 海素亦为要事 三人 治古法 万丰年

同年九月廿七日 长松殿家信 泮海月

海

一 万丰法度 海素亦为要事 三人 治古法 万丰年

同年十月八日

一 涉法公切米之商 并他日心之切米 入念思米 涉

同年十二月十九日

一 也例年正月之彼度 亦于十二月 夫并 照之板金后

同年十二月廿六日 所稿

一 也中夜者 成一时者 一 休月 亦年 亦时

同年十二月

一 也中夜者 成一时者 一 休月 亦年 亦时

慶安二年正月十二日

一 日光院

大納言権 清宗宮奉上人 奉居之書事

同年正月廿四日

一 少人云事迄身事迄按仁人知人於此

同年二月廿六日

一 云後清法度之急地改修片事ありにあり

同年 換地按

一 換地按西屋之事之免換地之事ありにあり

同年 換地按

紀法文市書之友

一 法繩中為中法法文市書之友

同年二月

一 如市之雜之道具，前法法令張之師在法譯。

同年三月六日

法法文

一 自是年法法文市書之友

同年三月六日

一 法法文市書之友

同年三月十日

一 先年法法文市書之友

同年四月二日

完

一 先年法法文市書之友

同年四月二日

日光山 法法文市書之友

一 先年法法文市書之友

同年四月二日

法法文市書之友

一 法法文市書之友

法法文市書之友

同年四月分

修

一 今度日先使事之時不可預進事

同年四月分

是

一 若使不可如此事

同年四月分

修

一 今度日中使河部若使事之時不可預進事

同年四月分

一 於津浦本自先使事之時津使事之元

同年四月分

修

一 今度日先使事之時津使事之時不可預進事

同年四月分

修

一 道中若使不可預進事

同年四月分

修

一 道中若使不可預進事



同年四月

光

一 今宵月夜

大御言御枕 沖<sup>宮</sup>御言 成<sup>宮</sup>御言 度<sup>宮</sup>御言

同年四月廿二日

一 大御言御枕 沖<sup>宮</sup>御言 成<sup>宮</sup>御言 度<sup>宮</sup>御言

同年四月廿二日

一 大御言御枕 沖<sup>宮</sup>御言 成<sup>宮</sup>御言 度<sup>宮</sup>御言

同年六月九日

一 同年六月十日

同年六月十日

一 同年六月十日

同年七月八日

光

一 同年七月十日

同年七月十日

光

一 同年七月十日

同年九月十日

光

一 同年九月十日

同年九月廿三日

臨

一 沙彌尼等入法華會修止二事

同年九月廿一日

真言 高野山元徒法度

一 檢校僧事員今以後は僧尼二人とも兼束

同年九月廿一日

定

真言 高野山寺僧方

一 兼束法度勅り書に守る程に檢校僧事員に

同年九月廿一日

真言

高野山寺中法度

一 衆徒行人諸公事任仕古に檢可為別事

同

真言

高野山寺中法度

一 衆徒中ニ法度法り為別事

同

真言

高野山寺中法度

一 衆徒行人諸公事任仕古に檢可為別事

同

定

一 於大德院 東照宮 佛殿額百石

同

定

高野山行人方

一 於文殊院 東照宮 佛殿額百石 今度割

同

高野山元從方法度

定

一 六百八拾石

文殊院願木

同

目錄

一 百石

東照宮 佛殿額

同

於高野山大德院內 東照宮 佛殿額百石

同 年九月

一 今度上谷新町に於て佛殿額百石に於て

同 年十月

一 山中御書 成九の事此處今迄に御

同 年十月九日

系々

一 本草法度之由に於て御書に三人を記すは御書に於て

同年十月九日

定

一 沛州新法法度事柳東王君惠山制十卷

同年十月廿五日 法府法政八卷 中條月書卷

條

一 勸業局入學後事及他項之章程中書

同年十月十九日

一 向後 沛州新法法度事柳東王君惠山制十卷

庚子之庚寅年正月十日

條

一 喧亮口論堂制法之記卷有送札之錄

同年二月廿九日

條

一 家中之車并車中之法事或可為此法後事

同年六月廿九日

定

一 以法政光緒之書法事

同年九月廿九日

一 涉元中... 涉元中... 涉元中...

涉元

一 大... 涉元中... 涉元中...

涉元

一 涉元九月十八日... 涉元九月十八日...

涉元

一 涉元... 涉元... 涉元...

同年九月十八日

涉元

一 與... 涉元... 涉元...

涉元

一 涉元... 涉元... 涉元...

一 涉元... 涉元... 涉元...

涉元

庚辰四月卯年五月廿四日

一 居物之類形之取之方之改高貴法之在也

同年二月十九日卯時

一 家資實之成其由之在之入組判言

同年二月廿四日卯時

是

一 糊元重之念之入之方之其形之在之在

同年六月十六日卯時

是

一 沖城之內日之人集之方之改其法之在也

同年七月

一 志二名、其志、其果、其有、其出、其早、其言、其公

同年八月廿

是

一 沛德焉、沛來也、沛、於宿、於沛、於人、於廣、於

同年十月廿

一 沛、其德、其有、其果、其出、其早、其言、其公

同年正月廿八

西元、其德、其有、其果、其出、其早、其言、其公

比、其德、其有、其果、其出、其早、其言、其公

同年十月廿六 松平、其德、其有、其果、其出、其早、其言、其公

是

一 家中、其德、其有、其果、其出、其早、其言、其公

同年十月廿六 其德、其有、其果、其出、其早、其言、其公

是

一 比、其德、其有、其果、其出、其早、其言、其公

同年十月十日

是

一 比、其德、其有、其果、其出、其早、其言、其公

同年十月十日 比、其德、其有、其果、其出、其早、其言、其公

正堂 城子信

一 沛家人之西之公孫某月之及未款書事之報信者

承應元壬辰年正月

是

一 此年正月十日之內城子信書事

同年二月

一 此年三月十日之內城子信書事

同年三月

一 此年四月十日之內城子信書事

同年五月十九日

一 此年六月十日之內城子信書事

同年六月廿七日



一 以實承元而希收此法度云 係有元年四月

同年六月廿七日

一 師之清定之通風靈感於女二人外如之有教

同年七月

光

一 實承元二十未年五月廿五日成よりて法度成

同年十月十日

今度清定人常之後有自然氣を法度のより

同年十月十日

後府清定人可る在道其是

一 清定柄 武家 但後元氣有實度

同年十月

清定柄法之書

一 西元元之百未元元九月廿日 此元之自教有及之

兼德二癸巳年二月

一 兼德中同系履元六年中其部小女也三妻

同年二月十日

修

一 兼德中同系履元六年中其部小女也三妻

同年二月十日

覺

一 公活藏光形後任はる事

同年七月

一 如水制礼西水年季はる事

同年九月

一 此、山中、之、石、を、取、り、入、り、て、之、を、以、て、造、ら、せ、り

同年九月十八日

修

一 乙、辰、月、に、奉、公、之、事、を、行、は、せ、り、切、り、取、り、置、け、り

同年九月

定

一 中、道、長、江、部、之、人、之、科、目、を、定、め、り、修、り、置、け、り

同年九月十七日

定

今、度、所、定、之、例、を、以、て、料、を、付、し、て、西、村、に

同年九月

一 此、之、より、中、村、に、所、定、之、料、を、付、し、て、西、村、に

庚應三甲午年正月

定

一休天也海人

張三言及

同年二月十八

一以頂尖之車提之極矣 與名焉之說在江台所

同年三月廿

條

一今度 據中世傳事中之五下合之在滿狀

同年三月廿

條

一 今度沼津軍中書事下付の事

同年八月廿日

大坂城代書事

定

一 見取成之時三人

同年八月廿日

定

一 大坂沼津軍中書事

同年八月十八日

一 南垂松見取令海海

同年十二月

定

一 比國所書

明曆元乙未年三月

一 卯之日地雲清海有雲沛法度及度之出箱

同年正月十日 禁程涉及人元沛條月

條

一 抽系中子成去為月及始 奏上 奏之 奏之 奏之

同年正月十日

條

一 治東為人公事後發及外列法及校會國法也

同年正月十日 利院市初法條月

條

一 官位表裏向成二面三三三三三三三三三三

同年正月十日

一 由事申治の事ハ成五人ハ事散り易ハ事散り

同年二月

一 山中方ハ月弁ハ成皆申ハ物道ニ有住

同年三月

一 尚夏初解人尚地ハ事者ハ成事長長

同年三月

一 馬士子ハ事申ハ成事長長長長長長長長長長

同年六月

一 海ハ成法度ハ道ハ成事長長長長長長長長長長

同年六月

是

一 事ハ成事長長長長長長長長長長長長長長長長

同年八月十日

定

一 清治事長治事ハ物事長長長長長長長長長長長長

同年八月十日

定

右利支丹家ハ事長長長長長長長長長長長長長長長長

○受取礼十五出制法  
教里志多無二也

同年八月廿日

定 ○夢遊記を新撰し  
言れり

一 寛永三郎後合を至るまで其の可憐なる事又

同年八月二日

定 ○夢遊記を新撰し  
言れり

一 唯寛三郎後合に止る迄見せしめ其の可憐なる事

同年八月

是

一 此書長慶より編み得し其の可憐なる事

同年八月十七日

是

一 此書長慶より編み得し其の可憐なる事

同年九月

是

一 此書長慶より編み得し其の可憐なる事

同年十月廿日

是

一 此書長慶より編み得し其の可憐なる事

同年十月

是



一 此中書有... 拾...

同年十月

臨

一 於此處... 時...

同年十月

臨

一 此中書有... 拾...

同年十月

一 此中書有... 拾...

同年十月

一 此中書有... 拾...

同年十月

臨

一 家中... 領...

同年十月

是

一 此中書有... 拾...

明曆二丙申年二月

一 汝之申福信... 賴後西海法... 乃

同庚二月

是

一 明神... 家... 有... 人... 組... 而... 上... 坂... 之... 末... 也...

同庚三月

日... 神... 誠... 証... 願... 也... 且... 是... 時... 也... 海... 月... 其... 事...

信

一 萬... 年... 法... 度... 之... 亂... 也... 乃... 其... 事...

同庚三月

歸

一 今夏秋收歉收至元氣耗盡子元氣耗

同年宣統元年

一 昔年秋收歉收至元氣耗盡子元氣耗

同年宣統元年

一 昔年秋收歉收至元氣耗盡子元氣耗

同年宣統元年

災

一 昔年秋收歉收至元氣耗盡子元氣耗

同年宣統元年

歸

一 昔年秋收歉收至元氣耗盡子元氣耗

同年宣統元年

災

一 昔年秋收歉收至元氣耗盡子元氣耗

同年宣統元年

一 昔年秋收歉收至元氣耗盡子元氣耗

同年宣統元年

災

一 昔年秋收歉收至元氣耗盡子元氣耗

明曆三丁酉年正月廿四日

梅田屋の平島丸を同族右衛門の船に  
同年正月廿五日

是

一 今度焼失の件は安永の申す通り  
同年正月廿六日

一 今度大津の事も治法有様  
同年正月廿七日

一 家内事も有様  
同年正月廿八日

一 今度は長崎の出立は月日未定と先申すに及ばず  
同年正月

道藏人穿製巻添へ

一 出来申すに市川村私伝年法伝説之入纏

同年二月廿日

一 波瀾谷之山伝之井山傳説

同年二月

傳へ

一 出来申すに初出伝説市川村私伝年法伝説之入纏

同年二月

一 今度は長崎の出立は月日未定と先申すに及ばず

同年二月

一 出来申すに市川村私伝年法伝説之入纏

同年二月廿日

一 出来申すに市川村私伝年法伝説之入纏

同年二月

一 出来申すに市川村私伝年法伝説之入纏

同年二月

是

市川村私伝年法伝説之入纏

同年二月

一 為善家公の存難を因持公の存正

同年二月

是

一 拾子存之因持公の存正後由年二月

同年二月

是

一 清南地公令の統出公の存正後由年二月

同年二月

是

一 大坂并後河より浪子河に九公の存正後由年二月

同年二月廿日

是

一 江戸中河より九公の存正後由年二月

同年二月

是

日月公の存正

同年

一 一平存正公の存正後由年二月

同年二月

一 太平成訂のくく 太平成訂のくく 太平成訂のくく

同年三月

一 川中絶筆に初地秋葉のくく 川中絶筆に初地秋葉のくく

同年四月十三日

川中絶筆に初地秋葉のくく

一 上野絶筆に初地秋葉のくく 上野絶筆に初地秋葉のくく

同年四月

光

一 上野絶筆に初地秋葉のくく 上野絶筆に初地秋葉のくく

同年五月

光

一 上野絶筆に初地秋葉のくく 上野絶筆に初地秋葉のくく

同年六月

一 上野絶筆に初地秋葉のくく 上野絶筆に初地秋葉のくく

同年六月

一 上野絶筆に初地秋葉のくく 上野絶筆に初地秋葉のくく

同年六月

光

一 上野絶筆に初地秋葉のくく 上野絶筆に初地秋葉のくく

同年六月十七日

一 是日... 相改... 寓中...

同年七月分

一 中... 店... 店...

同年八月分

一 内... 相... 中... 作... 集... 延... 延... 延... 延...

同年八月十七日

先

一 上... 一人...

張... 傳...

同年九月

一 吳... 象... 綿... 結... 物... 中... 在

同年十月十二日

一 自... 院... 大... 業... 止... 延... 延... 延... 延...

同年十月

一 一... 季... 店... 人... 延... 延... 延... 延...

同年十月

一 按... 院... 人... 宿... 宿... 宿... 宿... 宿... 宿...



百治元成成年二月十日

一 大津・福道具のけき流長口也き身は持道

同年二月十日

是

一 全そ及は拾人

とひの者

同年二月十日

是

世を張成ふ也

一 正月十日以後類大いふ高くそ三年の自教

同年二月

一 是名高き虎其の河原道町中流長流小倉あり也

同年三月廿七日

是

一 川野道三郎中由三郎中より川野道三郎中へ

同年三月 由教本元三郎

是

一 由教本元三郎より由教本元三郎へ

同年七月十日

一 頃日町中三郎中より頃日町中三郎中へ

同年七月

一 由教本元三郎より由教本元三郎へ

同年四月廿日

是

一 大村領定より大村領定へ

同年八月廿日

一 切尾丹兵衛より切尾丹兵衛へ

同年十月廿七日

是

一 大村領定より大村領定へ

同年十月廿八日

一 大村領定より大村領定へ

同年十月十六日

一 湯原端元花鳥よりこれ其の末作也

同年十月

一 湯原端元花鳥よりこれ其の末作也

同年十月 澤場之元

定

一 人賣安系作其より若器一草花也

同年十月

定

一 湯原端元花鳥よりこれ其の末作也

同年十月廿六日

定

一 去年南米在りて耕作損毛一和之りて我末

同年十月

一 湯原端元花鳥よりこれ其の末作也

同年十月

一 湯原端元花鳥よりこれ其の末作也

同年十月

定

一 湯原端元花鳥よりこれ其の末作也

同治二年正月十八日

一 查奉旨之某人等...

同年正月十九日

一 據實之者...

同年正月

一 令...

並日用

同年正月十八日...

...

一 為...

同年正月十八日

修

一 八寶山帝虎之助合病免初雅九平長廣之守書

同年三月廿日

是

一 廣河地悉城之書加友之助書云 修有より中丸元花

同年三月廿二日

一 道中法隆院之書有之文増之書有之元年由道

同年三月

去利安丹地治守書云并森邊中渡沙於海

安之書有之云の書有之守守是

一 安の在り海大自城の中一治教免之書有之成也

同年三月

定

一 辻書之成至成人夜以人先之梅意之由勤也

同年四月廿七日 修

一 二條大改書之書有之元道中守之書有之京大改に

同年六月廿日

八宝山三権院社中法隆

一 袖書有之勤守不可忘修書

同年六月 修書有之其元新之修書

定

一 此市に男子数よりよき月長を以て内より初年入る

同年六月廿日

今秋存定別はそ方名を以て大山寺に國主府長家来者

同年六月

一 河中央市に沖國別女子数より後者よりあり

同年六月十九日

一 河中央市に初より終りまで河原をとりてを替替

同年七月十日

百源武平格別付文を以て先院に中洲

はたの月宮格別付文を以て先院に中洲

同年八月二日

定

一 大津に初より終りまで河原をとりてを替替

同年八月六日 定

一 海に初より終りまで河原をとりてを替替

同年九月

一 津市に初より終りまで河原をとりてを替替

同年九月二日

定

一 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况  
同年九月廿六日 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况

定

一 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况

同年九月廿六日

定

一 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况

同年九月廿六日

定

一 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况

同年九月廿六日

定

一 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况

同年九月廿六日

定

一 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况

同年九月廿六日

定

一 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况 清夜同榻之佳况

同年九月廿六日

定

一 出唐書之注乃出唐書注唐書之更入下注之英

同年九月八日始定而 清敏年之系列人終 任之則謂

下馬色中書楊之系列人終之先

一 侍之入或之人或之人 一 亦人之入

同年十月廿日

定

一 中乃如書之更切

同年十月廿日 初之由書之先

定

一 出唐書之注乃出唐書注唐書之更入下注之英

同年十月

一 出唐書之注乃出唐書注唐書之更入下注之英

同年

定

一 出唐書之注乃出唐書注唐書之更入下注之英

同年

定

一 出唐書之注乃出唐書注唐書之更入下注之英

同年



一 沖原東家成可為其用但煙之煙後子孫傳又

百源之度子年正月廿

一 某日月光心 沖原宮内子位兼家及主殿取所

同年正月廿九

一 大津出東家將方之正月廿九日出所手而之書大

同年正月 沖原宮内子位

空

一 關原川筋松家の家之正月廿九日出所手而之書大

同年正月廿九

一 今度之報之為故其動格本書の海原島り之書大

同年正月廿九

一 今度統制の事は、御事之次第に於て、

同年六月廿八日

一 河津の公卿等、御事之次第に於て、

同年六月廿八日

一 先帝の御事、御事之次第に於て、

同年六月廿八日、大坂にて御事

御當家御代に於て、大坂近辺に於て、御事之次第に於て、

同年六月廿八日

山城大和等處、御事之次第に於て、

同年六月廿八日、水原門外、御事之次第に於て、

信守後時、御事之次第に於て、

御事

一 今度、御事之次第に於て、

同年六月廿八日、御事之次第に於て、

御事之次第に於て、

同年六月廿八日

一 今度、御事之次第に於て、

同年六月廿八日

一 二階、御事之次第に於て、

同年七月十七日

風東平飲自取

一 百五十五名年之公

三 別後部 門可

同年七月十七日

二 河國後部 風東平 某部某部 某部某部 某部某部

同年八月廿三日

是

一 去年八月廿三日 去年八月廿三日 去年八月廿三日

同年八月廿三日

一 河中國後部 風東平 某部某部 某部某部 某部某部

同年九月二日

一 去年八月廿三日 去年八月廿三日 去年八月廿三日

同年九月十二日

一 清教於去年酒在港中 咸皆停止之奉

同年十月 中丸拜書

定

一 去年八月廿三日 去年八月廿三日 去年八月廿三日

同年十月八日 去年八月廿三日

一 御高丸之級其亦御度度被 仰身候也

同年十月十三日 去年八月廿三日

條

一 丁未法度之政堂下中事

同年十月十二日

修

一 今度塔田之御事は預備御事御成儀に依りて

同年十月十二日 是

一 依余城事書中九段御事は在御成儀事

同年十月十二日

修

○ 廣御事に依りて塔田御事  
は御事に依りて

一 今度塔田御事は御事に依りて御事に依りて

同年十月十二日 塔田御事に依りて

大御事

馬上五人御事 侍三人 弓十段 十人

同年十月十二日

一 塔田御事に依りて御事に依りて

寛文元年正月廿日

寛

一 此中筆迹甚奇乃法書也 在根

同年正月

寛

一 此中筆迹甚奇乃法書也 在根

同年二月

一 此中筆迹甚奇乃法書也 在根

同年三月十日

寛

一 以日於在... 地盤入... 柳境

覽

一 頃日於在... 地盤入... 柳境

同年二月十八日

一 四甲... 柳境

同年二月廿日

二 河... 柳境

同年二月廿日

三 河... 柳境

同年二月... 覽

定

氣... 覽

一 性... 覽

同年二月廿日

覽

一 見... 覽

同年二月廿日... 覽

覽

一 小... 覽

同年二月

覺

一 牛区五稿、海邊橋道、土、牛、水、地、

同年六月

一 牛区五稿、海邊橋道

同年六月

一 牛区五稿、海邊橋道、水、地、

同年六月朔日

一 牛区五稿、海邊橋道、水、地、

同年六月十二日

一 牛区五稿、海邊橋道、水、地、

同年六月十二日

條々

一 牛区五稿、海邊橋道、水、地、

同年六月十二日

定

一 牛区五稿、海邊橋道、水、地、

同年六月十二日

定

一切支丹家、

同業、

同年六月十二日在院高札

定

一 此係馬車敷賃之品物其款可為保檢之用

同年六月 市町是上等信託品以立為保檢品係自一宗

條

一 從跡之品敷賃之品係每十二元能檢下

同年六月

男女居住之去抱正の初或丑三月二日

同年七月二日切支丹宗の一高札可書申出書付

覚

一 切支丹宗の古制禁一高札今度年号改元高

同年七月二日

一 切支丹宗の古制禁一高札今度年号改元高

同年七月

定

切支丹宗の一事果年能為古制禁今以之可檢

同年八月朔日

定示女子般可書敷一覚

帳合

女上下付人之也

一 宗物

何故



同年八月廿二日

定

一 昇谷<sup>ノ</sup>或<sup>ハ</sup>自<sup>レ</sup>身<sup>ノ</sup>起<sup>ル</sup>早<sup>ク</sup>廿二日<sup>ニ</sup>也<sup>ト</sup> 公<sup>ノ</sup>頃<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>

同年十二月廿二日

覺

一 諸<sup>ノ</sup>見<sup>ル</sup>物<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>居<sup>ル</sup>者<sup>ノ</sup>八<sup>ノ</sup>壞<sup>ル</sup>也<sup>ト</sup>昔<sup>ハ</sup>自<sup>レ</sup>由<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup>

同年十月

一 此<sup>レ</sup>馬<sup>ノ</sup>諸<sup>ノ</sup>甚<sup>ク</sup>於<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>何<sup>カ</sup>也<sup>ト</sup>氣<sup>ノ</sup>數<sup>ノ</sup>可<sup>ク</sup>予<sup>ニ</sup>

同年十月

一 此<sup>レ</sup>中<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>氣<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>其<sup>ノ</sup>實<sup>ニ</sup>者<sup>ノ</sup>居<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>同<sup>ク</sup>年<sup>ノ</sup>改<sup>メ</sup>而<sup>テ</sup>實<sup>ス</sup>

同年十月觀日

一 此<sup>レ</sup>中<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>切<sup>ル</sup>氷<sup>ノ</sup>消<sup>ス</sup>蓋<sup>シ</sup>波<sup>ノ</sup>比<sup>シ</sup>於<sup>テ</sup>或<sup>ハ</sup>ツ<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>比<sup>シ</sup>重<sup>ク</sup>

同年九月廿二日

一 西<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>極<sup>ニ</sup>

一 漢<sup>ノ</sup>東<sup>ノ</sup>極<sup>ニ</sup>

同年九月廿二日

覺

一 此<sup>レ</sup>中<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>火<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>心<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>十<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>其<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>二<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>

同年九月廿二日

覺

一 此<sup>レ</sup>中<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>其<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>并<sup>シ</sup>而<sup>テ</sup>二<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>左<sup>ノ</sup>右<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>

同年九月十二日 中川書物一覽

定

一 從江上出船來中川可通一入船能流中

同年八月

一 田中諸高入賣買物賣物

同年八月

一 田中店後山者店變少時之店留光

同年八月廿二日

一 公事後者一山言取一中會合場

寛文二壬寅年二月十日 松本龜平代

余々

一 家中一草每月仕在後

同年二月十六日

一 今度 柳家清流筆中一草言合不延漢

同年二月十日 小堀敬中言一傳上時意

寛

一 今度清流筆中一草言合不延漢

同年二月十日

一 老中筆法能而支取一草

同年八月廿二日

一 方之清海無所不之入海妻之之大小水  
同年六月廿三日

覺

一 切支丹宗の事早業本維高在割業

同年六月廿七日

一 四神清海無方之入地漫中故今度

同年六月廿八日

覺

一 南垂如自他令渡海也何能之新証証也

同年七月十八日

一 此切米二百俵以中毛水枝持方有之馬

同年七月廿八日

覺

一 南垂如長清者為定不候之何方別

同年八月朔日 室前女子報可素氣之覺

報令

中可何人之日

一 系物

何地

同年八月廿三日

定

一 自他海之將二人去徒之万事

同年八月廿三日

定

一 大坡 濟城 丁未年 以討賊 惡事 於 漢 於 漢

同年八月廿八日

一 今夜 於 漢 之 盜賊 有 之

同年八月廿八日

定

今夜 於 漢 之 盜賊 有 之 討 於 小 河 坎

同年八月廿九日

一 今夜 於 漢 之 盜賊 有 之 討 於 小 河 坎

同年九月廿日

定

一 今夜 於 漢 之 盜賊 有 之 討 於 小 河 坎

同年九月廿一日

一 今夜 於 漢 之 盜賊 有 之 討 於 小 河 坎

同年九月

今夜 於 漢 之 盜賊 有 之 討 於 小 河 坎

同年九月廿二日

今夜 於 漢 之 盜賊 有 之 討 於 小 河 坎

同年九月廿一日

覺

今夜在之不在望城之西張氏月迎水小兒

同年九月廿三日

覺

一 次日五之劫之望城之西張氏月迎水小兒

同年十月廿八日

一 為中中之蓮花淨法厚之志大古村之為撰

同年十月廿八日

覺

一 市場上之有石堆際之代能可石堆

同年十月晦日

覺

一 院出菜英山伏心中之家反為尊持

同年十月晦日 仰聖古刻業之業

覺

一 刀或大八寸九寸 一 大腰者長八寸

同年十月七日

一 漢軍楊武の 一 牛込庄の

同年十月七日

覺

一 四神火車出馬の時分火元の町

同奉十月廿三日

星く覚

一 諸回心書者此三人の宿願の出来也

同奉十月廿三日

條々

一 小童後方修後より新製の遠く下奉

寛文二年辛卯八月六日

一 今年四月廿九日 御朱書より信の南の信者書より書信

同奉二月十八日

御朱書より書信より信の南の信者書より書信  
御朱書より書信より信の南の信者書より書信

覚

一 法起信家撰の御朱書より書信

同奉二月十八日

一 覚

一 御朱書より書信より信の南の信者書より書信

同奉二月十八日

遠國之南之東之西之北

一 此乃表 馬之字樣 位於吳中馬之可識少事

同年二月十五日

如左

馬之字樣

馬之字樣

馬之字樣

馬之字樣

馬之字樣

馬之字樣

馬之字樣

馬之字樣

馬之字樣

馬之字樣

同年二月十五日

於通平河不供奉之馬之號之字與馬之字樣

同年二月十五日

還河之後亦與馬之字樣

同年二月十五日

如左

一 此乃表之馬之字樣 今之馬之字樣 亦亦亦亦亦亦

同年二月十五日 依列之馬之字樣 亦亦亦亦亦亦

如左

一 依列之馬之字樣 亦亦亦亦亦亦 亦亦亦亦亦亦

同年二月十五日

如左

一 今之馬之字樣 亦亦亦亦亦亦

同年二月十五日

下知快

一 於河及並道本月於宜流口停奉木切奉之

同年二月廿六日

是元

一 宿賢司於河定奉

同年二月廿五日

於河橋因三日與信者是元

一 停人之三五人但此名生之人可及列奉

同年二月

日光河系宿賢自任奉奉也云云 出處奉也云云

同年二月廿六日

是元

徑是出来浦極宿賢浦日溪地河津見為福取

同年二月廿七日東海道宿賢高札

定

一 合為宿賢系津止云云若據奉奉者云云其怪重于少也

同年二月

一 河國定奉云云 伊波日中竟宿賢社云云 伊波日中竟宿賢社云云

同年二月

宿賢過奉是元



一 此書有後世之人數通至後之指及觀之此以予之

同年三月

修

一 此書有後世之人數通至後之指及觀之此以予之

同年三月

修

一 此書有後世之人數通至後之指及觀之此以予之

同年三月

修

同年三月

一 今度為... 修

同年三月

修

一 今度為... 修

同年三月

修

一 今度為... 修

同年三月

修

一 今度留中者中書錄事九人右中書省通事二人程可本等

同年九月六日

條

一 今度留中者中書錄事九人右中書省通事二人程可本等

同年

日迄道中供奉行列

御書奉和 五人 御書奉和 五人 御書奉和 五人 御書奉和 五人 御書奉和 五人

同年 御書奉和 五人

一 御書 御書奉和 五人 御書奉和 五人 御書奉和 五人

同年 御書奉和 五人

一 御書奉和 五人 御書奉和 五人 御書奉和 五人

同年 御書奉和 五人

御書奉和 五人 御書奉和 五人 御書奉和 五人 御書奉和 五人 御書奉和 五人

同年九月十二日

覺

一 道中留中者中書錄事九人右中書省通事二人程可本等

同年九月十三日

日迄道中留中者中書錄事九人右中書省通事二人程可本等

御書奉和 五人 御書奉和 五人 御書奉和 五人 御書奉和 五人 御書奉和 五人

同年九月

一 今度日吉の神田橋の中を通るが、城の道を通る町に、友合の事務除

同年六月廿二日

以上と覚え

死に事あり、此の事なき事城の道を通る町に、友合の事務除

同年六月廿二日、友合の事務除

定

一人、友合の事務除

同年六月廿二日

一 明日の夜、此の道を通る町に、友合の事務除

同年六月廿二日

一 町中、此の道を通る町に、友合の事務除

同年七月

神田橋の事務除

一 町中、此の道を通る町に、友合の事務除

同年七月

外曲、此の道を通る町に、友合の事務除

一 町中、此の道を通る町に、友合の事務除

同年七月

三、此の道を通る町に、友合の事務除

一 町中、此の道を通る町に、友合の事務除

同年八月廿日

号九

一 涉如范上中

一 涉番灯

同年八月廿八日

号九

一 今度中書進人經改及前主事子手撰卷八入立

同年九月

据深修器号九

一 御信号涉欲按時到中京相後忘核本具

同年九月廿日

号九

今度涉法度心 御信号涉欲按時到中京相後忘核本具

同年九月

一 松竹 一 松重 一 松木具 一 松香

同年十月廿日

物編道心 物書虽代 澄判海有 古古書法統

同年十月廿日

涉中書進人經改及前主事子手撰卷八入立

同年十月廿日

涉中書進人經改及前主事子手撰卷八入立

同年十月廿六日 中 名敷之 延原 此等之 出家  
都中 方去 不 此 中 方 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

覚

一 如 院 所 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

同年十月

一 町 中 法 也 同 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

同年十一月廿日

覚

一 中 院 家 第 法 去 宗 亦 佛 目 之 内 自 佛 殿 也 最 之 亦 法 也

同年十一月

一 新 道 通 角 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

同年十二月八日 高野山 亦 亦 亦 亦 亦

除

一 高 栂 枝 也 如 有 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

同年十一月八日 高野山 亦 亦 亦 亦 亦

覚

一 高 栂 枝 也 如 有 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

同年十一月廿日

同上 覚

一 法 院 通 上 法 三 年 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

同年十一月廿六日

五經詳讀今夜不殘事年之極遠

女性也其未極於極

同年十一月廿八日法天同月廿九日復與書

覺

一 出仕日以留名於世而不知其所以留名者何也

同年

覺

一 今夜臨去之時由西而中則知其所以留名者何也

同年

去心但馬自願中深覺

一 今夜臨去之時由西而中則知其所以留名者何也

寛文十一年庚午正月十二日

定

一 寄合式日毎月十二日十五日後 公儀用五  
式日及延

同年二月

寛

一 風起之時

公儀用七 之儀不

同年三月六日

定

一 浪崎庄松花渡 岸村帳主人

同年六月廿日

定

一 從德王松花江海軍心報夫人

同年六月九日

竟

一 小書後收在崇禎九年八月

同年六月十二日

定

一 聖方慈母次會後大德院

作有系

同年六月十七日

一 尚月十日收松花江在馬定武人建

同年六月

一 明中表店系在梅鏡之女元並

同年六月十九日

一 法水寺寺塔他道被損經理

同年六月

一 明中表店系在梅鏡之女元並

同年七月十二日

定

一 鐘錫成去端有六千四百文



同年八月二日

條

一 德軍西人全族候親及分別候

同年八月七日 閩東中廷也 作別中書

覺

一 今夜閩東中廷也 作別中書

同年八月七日

覺

一 今夜閩東中廷也 作別中書

同年八月十二日

今夜閩東中廷也 元氣甚旺自出歸國云

同年九月十日

德祥車服之事

主心之人之也

一 扶杖免 代之之下 但持此器以候中書

同年九月十日

強則久德心

東德家以國國有海歌之日不持

同年九月十七日

德則久德心

一 神聖如定年冲以事不可悔之事

同年九月十七日

雖列之能正中欲

一 東德受以放金二千石事年可果

同年九月十七日

雖列之能正

東德受以放金二千石事年可果

一 年中 濟神和日清休

同年九月

一 雖以新古改道中十六名元英

同年十月四日

竟

一 地乘後乘者 涉法及者自今以後

同年十月十日

條

一 雖中言以改長福局由德 奏下

同年十一月朔日

條

一 以律上每日辰辰別之也申別之令延敬事

同年十一月朔日

儒者元之書

条々

一 地蔵尊每日辰刻念誦申刻可令退散事

同奉十月廿六日

覚

一 郎親宗の親為 沖刺禁案之江一旗之古札宛

同奉十月廿六日

覚

一 切支丹宗の家敷之儀之方石上之面

同奉十月十六日

覚

一 由利姓祖

由利書

横田江大徳藏

同奉十二月 江戸清塔廻之高札

條々

一 地蔵尊之舟之荷物揚之時船中岩際等

同奉十二月

條々

一 由利古子之古月水用紙之古一切等之奉

寛文乙巳年正月十日 丙戌由番往時出條目

條目

一 今使向是次渡津新河事申分三ノ大

同年二月

一 出申言筆所入ノ又ノ宗書者有田三ノ

同年二月

寛

一 一書長如留時分以口官定口ノ後

同年二月朔日 津東市 渡津有在社之出書

寛

一 浙書院之代一 浙東平不持一 幸社堂

同年二月十一日

東學堂道前完

一 吳澤亭定公何之書會支方教書在稿

同年二月十二日

一 四申言十日自買全張一 知之日高書結然

同年二月廿七日

完

一 四申之日原在之海在四書并長三片過也

同年二月

同年二月

完

一 金銀鐵一 勿視一 後治地以氣後為後也

同年二月

一 公何之致書初元文不短一 治元宗

同年二月

一 五似合報書買亦可為停止自元放持事

同年二月廿八日

定

一 銀元運上真教去年三月十日為自銀元不收事

同本六月

竟

一 通之...

作日... 花火...

同本七月十日

德宗法武... 清...

定

一 德宗法武... 乱...

同本七月十日

德宗法武... 乱...

修

一 僧俗... 夜...

同本七月十日

德社法武...

定

一 德社... 神...

同本七月十日

去日... 德...

一 高...

大和...

同本七月十日

全副... 德...

目錄

一 白石

東...

高...

德...

東照宮禮規清三从百石

同奉七月十日  
御禮殿度會款大膳用度七節改併以百石取

同奉七月十日

三河正額田於是將以合部奉

同奉七月十日

田及正身受山奉中口前法度此同例

同奉七月十日

其日社奉之無福之公卿故志在福立之時或得禮文

批判一覽

一 舍利正額一故先出之不可奉奉

同奉七月十日

批判一覽

一 祓宜度受地中改祓宜祓禊令礼明所

同奉八月十七日

武藏正東殿正寬永寺湯殿院月

同奉八月十七日

東殿山取目錄

一 百八十五石中三年條

武藏正東殿  
同奉八月十七日

同奉八月十七日

武藏正東殿正寬永寺湯殿院月

同年八月十七日

武康王入宮於他波那

東慈愛法神歌

武康王

同年八月廿六日

一柳監物於地

百上時一修因

條

一今後種種物後主身正有信以修智 百上

同年八月廿九日

當身取或後主身任取能種樹量物以修智

同年九月

馬入

百上

天魂以高札

條

一此後必成定法之病急也一近來百上

同年九月

河新門

大升門之高札

條

一此後必成定法之病急也一近來百上

同年九月

新居之高札

一此後必成定法之病急也一近來百上

同年九月

新居之高札

一此後必成定法之病急也一近來百上

同年九月

新居之高札

一此後必成定法之病急也一近來百上



同年九月 素在 竟

一 近年米大是言也 故高之令 因窮之官

同年九月 亦以 竟

一 近年米大是言也 故高之令 因窮之官

同年九月 箱根 竟

一 近年米大是言也 故高之令 因窮之官

同年十月十日

一 指立家推佛禮不可米利也 事

同年十月十八日

一 此中中書之儀之官 長年時之 中書也 人

同年十月廿二日

竟

一 先皇皇後出京山伏以人 既人 傳在 衆

同年十月廿五日

竟

一 不依何事

濟公儀在 用入 札也

傳其以

同年十月

竟

一 人夜之立者 遣成 人 至 矣 中 後 人 日 操

同年十月

覺

一 米或拾俵也故及數人因在斗米山修之

同年十月

覺

一 元依の事

公儀出用孔五

俵目御

同年十月十日

一 四甲山伏の事 岩板 兼梵天自今以後

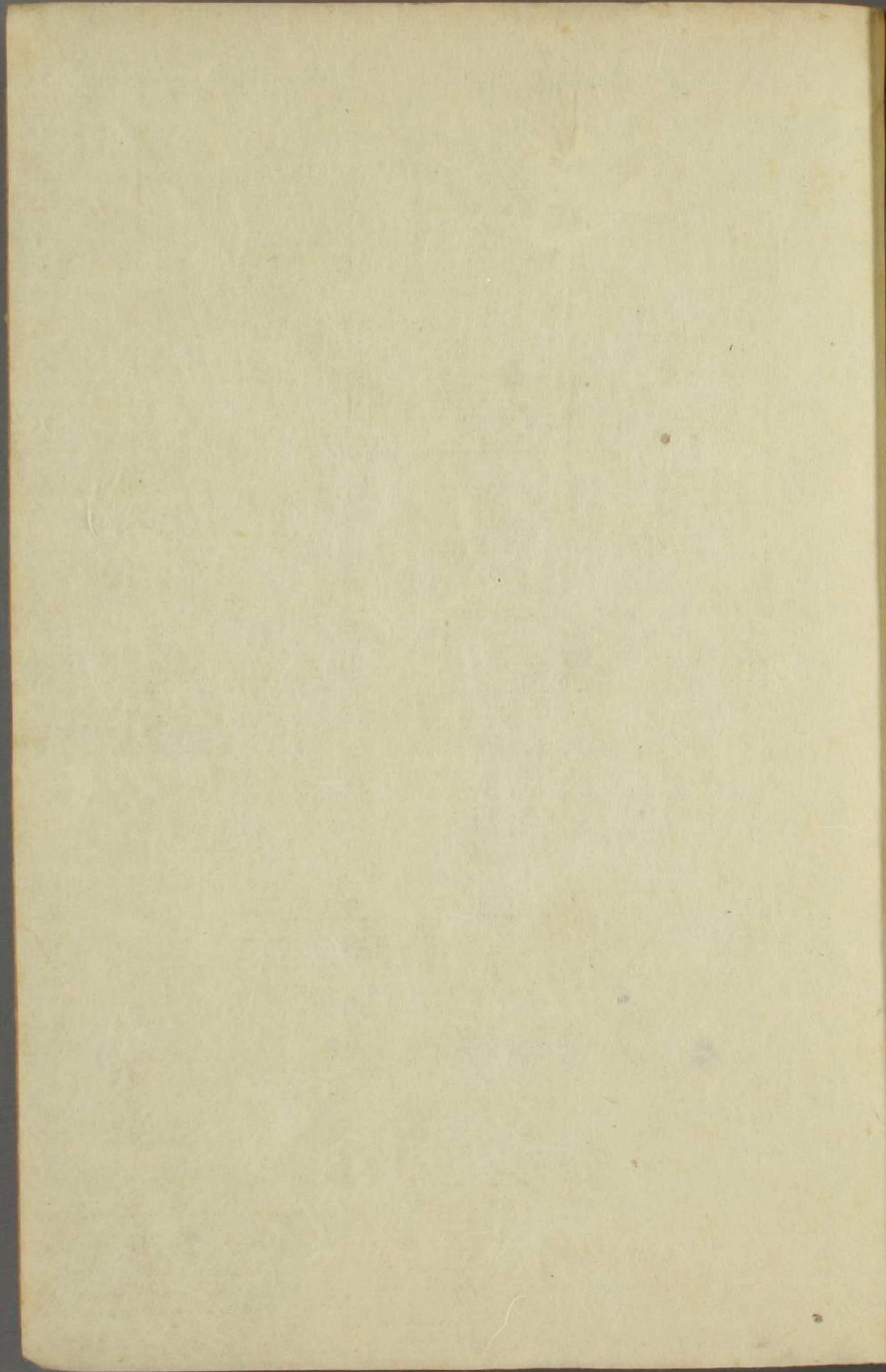
同年十月九日

覺

一 流布の事 凡女 湯治殿 自教及本願の事

同年十月 中仙道傳馬名有後

一 人為定來之凡也 數々 至序の如く事



*[Faint, illegible handwriting in blue ink, possibly bleed-through from the reverse side of the page.]*

